

不思議な音は『のら』の鈴の音だったのか、『マナ』は『のら』に尋ねた。「その鈴はどうしたの」。すると『のら』は「神様の贈り物」と言い返した。贈り物とはどういう意味なのか、『マナ』は不思議に思った。

それは『のら』が旅の途中、民家の軒下で野宿をしていたところ、鈴が空から降ってきた頭に当たったのであった。そして鈴が天から降ってきたので、『のら』は神様の贈り物と思い込んだのである。しかし頭に当たった後遺症で記憶を無くしてしまい、自分が何者で、何の為に旅に出たのかも忘れてしまったよつである。やがて記憶を無くし、旅の目的を忘れ、さらに帰る場所さえも忘れてしまった『のら』の旅は、困難の連続となっていた。それは町の人から見れば、『ミミをあさる野良猫のような存在だったのかもかもしれない。どのぐらいの月日が流れたのだろうか。ある夜、『のら』は大きな木の下で拾った鈴を手に取り、音を聞いていた。それは鈍いゴロゴロと言つ不思議な音であった。やがて『のら』は深い眠りへと落ちていった。『のら』が目を覚ますと不思議なことに、鈴が根っ子のよつな蔦に付き、首にぶら下がっていた。その蔦を『のら』は以前見たことがあるよつな気がした。ふと上を見上げると、そこは一面根っ子のよつな蔦が木から垂れ下がっていた。その時心地良い風が吹いた。鈴がゴロゴロと鳴り、鈴の中から微かな声が『のら』には聞こえたよつな気がした。やがてその声に導かれ、どうにか今は『マナ』の家となっているこの家にたどり着いたのであった。『のら』が聞いた声は本当に神の声だったのか、それとも鈴が風で鳴っただけの音なのか、今となってはわからない不思議な出来事であった。

